

いのち尊ぶ教育

人命軽視の風潮やいじめ・自殺が社会問題化する中で、生徒自身の意識変化も社会の変化と無縁ではないと考え、平成5年に『いのちの日』と改名されてから、道徳教育を中核として、教科・領域、人権尊重教育、福祉教育、環境教育、安全教育、食育教育、健康教育、防災教育、進路指導、性・エイズ教育、教育相談等の総合的な教育指導を続けてきました。それは、健康・安全重視の教育(生命体としての命)を根底にしながら、『いのち』尊ぶ道徳教育、心の教育へとつながっていきます。こうした秋多中学校の教育を「いのち尊ぶ教育」と呼んでいます。

なぜ「いのちの日」があるの

昭和60年 「健康と安全を願う日」の制定

6月16日というのは、昭和59年にテニス部の1年生の女子生徒が、練習前のウォーミングアップで校舎の周りをランニングしている途中で倒れ、その後亡くなったという事故があった日です。当時の生徒はもちろん、先生たちも大変つらい思いをしました。

秋多中では、この日を永遠に忘れてはならない日、再び、心痛む悲しい事故を起こしてはならないと決意する日、そして、そのための行動や実践を起こす日として、次の年の昭和60年に「健康と安全を願う日」という秋多中の永年祈念日を制定しました。

その後、それをただ健康とか安全を願うだけの生物としての「命」を守るだけでなく、人間らしく豊かに、心がいきいきと生き、自他のいのちを尊び、生きとし生けるものへの愛とつくしみの気持ちである「いのち」の大切さを育む日として、平成5年6月20日に「いのちの日」と改定しました。

若き鴨下先生の死

平成6年の1月9日に、理科の先生であった鴨下先生が、約1年半にわたる苦しい闘病生活の末に35歳の若さで肺がんのために亡くなりました。鴨下先生は、大変心のやさしい、生徒から慕われている素晴らしい先生でした。あるとき、クラスの生徒が傷ついて道端に落ちていたスズメの子を、登校中に見つけ、それを職員室に持ってきて、鴨下先生にあずけました。先生は一生懸命にそのスズメの子の世話をしましたが、野生の鳥というのは、なかなか人間の世話で元気になり生き返るのは大変難しいもので、そのスズメの子は死んでしまいました。そのことをクラスに帰って、クラスの生徒の前で「すまなかった…」と頭を下げて謝ったそうです。それほど心のやさしい先生でした。

命をつなぐ「あさがおの種」

その後、鴨下先生の机を整理していたところ、野鳥を描いたスケッチブック、「あさがお」の種12粒が紙に包まれて、ていねいにしまわれていました。野鳥や植物など、小さな「いのち」までつくしみ、愛されるいかにも鴨下先生らしい品々でした。

「いのちの碑」の建立

平成7年の3月7日に、鴨下先生のご家族のご厚意により、常に「いのちの尊さ」に思いを致し、「いのちの日」制定の趣旨を永く忘れることのないよう、その決意を碑に刻み、「いのちの碑」が建てられました。



レリーフ

この石碑には、少女がやさしく、鳥を包み込むように、手を差し出している姿が刻まれています。そのレリーフには、少女には不釣り合いな、男性のようなごつい手が彫られています。

なぜそのような不釣り合いな手になったのでしょうか。そのレリーフの製作を指導した当時の美術の先生であった榎(さわらぎ)先生が、以前、鴨下先生に、ホタルが見える場所を聞いた時のことです。榎先生はホタルがいたら捕まえて持って帰るつもりで、鴨下先生に「ホタルは手で捕まえられるの」と聞くと、鴨下先生は、その両手を優しく合わせ「こうやってそっと捕まえるといいよ」と教えた後に、「ホタルはその場所で生きることが一番幸せなんだから、捕まえても持って帰らない方がいいですよ」と言われました。榎先生は、その時の小さな命をそっとつくしむような、限りなく優しい表情をした、両手のことが脳裏に焼きついたそうです。

榎先生は、この話を一切、製作者の生徒には話さなかったのに、不思議なことに、少女の像のはずが、両手だけが、まるで鴨下先生が優しく鳥を抱いているような手の形ができあがりました。その手の温かさは、鴨下先生の心そのものであり、やわらかく曲げられた指の優しさは、鴨下先生の生き方そのもの。そんな想いがあのレリーフには込められています。是非、あの石碑の中に込められている想いを生徒のひとりひとりがしっかりと心に刻んで欲しいと思います。

秋多中の取り組み

- ①「健康と安全を願う日」を永年祈念日と制定されてから秋多中では、平成8年度より、毎月1回、交通安全のための街頭指導を登校時に実施しています。(自転車登校生徒のヘルメット着用義務)
- ②生きていたならば鴨下先生自身がきっと栽培したであろう、そのあさがおの種を植えてみたところ、そのうちの5株が花をつけました。秋多中では鴨下先生の意志を引き継ぎ、「あさがお委員会」を設置しました。その委員会は、発展的に解消しましたが、今は、多くの生徒で育てその種を毎年、生徒全員に12粒ずつ配り、また、地域の方へ鉢植えをお配りして、「朝顔と共に広がる いのちの日」という句を実践して、共に育てる活動をしています。

(1年の総合学習・朝顔を育ていのちの大切さを地域と共に学習する)

- ③道徳授業地区公開講座の実施。(学年のテーマに応じ各クラスに講師が入る地域一体型の授業の実践)
- ④人権尊重教育推進。(いじめのない学校を目指す)(マイナス言葉撲滅)

いのち尊ぶ教育

人命軽視の風潮やいじめ・自殺が社会問題化する中で、生徒自身の意識変化も社会の変化と無縁ではないと考え、平成5年に『いのちの日』と改名されてから、道徳教育を中核として、教科・領域、人権尊重教育、福祉教育、環境教育、安全教育、食育教育、健康教育、防災教育、進路指導、性・エイズ教育、教育相談等の総合的な教育指導を続けてきました。それは、健康・安全重視の教育(生命体としての命)を根底にしながら、『いのち』尊ぶ道徳教育、心の教育へとつながっていきます。こうした秋多中学校の教育を「いのち尊ぶ教育」と呼んでいます。

なぜ「いのちの日」があるの

昭和60年 「健康と安全を願う日」の制定

6月16日というのは、昭和59年にテニス部の1年生の女子生徒が、練習前のウォーミングアップで校舎の周りをランニングしている途中で倒れ、その後亡くなったという事故があった日です。当時の生徒はもちろん、先生たちも大変つらい思いをしました。

秋多中では、この日を永遠に忘れてはならない日、再び、心痛む悲しい事故を起こしてはならないと決意する日、そして、そのための行動や実践を起こす日として、次の年の昭和60年に「健康と安全を願う日」という秋多中の永年祈念日を制定しました。

その後、それをただ健康とか安全を願うだけの生物としての「命」を守るだけでなく、人間らしく豊かに、心がいきいきと生き、自他のいのちを尊び、生きとし生けるものへの愛といつくしみの気持ちである「いのち」の大切さを育む日として、平成5年6月20日に「いのちの日」と改定しました。

若き鴨下先生の死

平成6年の1月9日に、理科の先生であった鴨下先生が、約1年半にわたる苦しい闘病生活の末に35歳の若さで肺がんのために亡くなりました。鴨下先生は、大変心のやさしい、生徒から慕われている素晴らしい先生でした。あるとき、クラスの生徒が傷ついて道端に落ちていたスズメの子を、登校中に見つけ、それを職員室に持ってきて、鴨下先生にあずけました。先生は一生懸命にそのスズメの子の世話をしましたが、野生の鳥というのは、なかなか人間の世話で元気になり生き返るのは大変難しいもので、そのスズメの子は死んでしまいました。そのことをクラスに帰って、クラスの生徒の前で「すまなかった…」と頭を下げて謝ったそうです。それほど心のやさしい先生でした。

命をつなぐ「あさがおの種」

その後、鴨下先生の机を整理していたところ、野鳥を描いたスケッチブック、「あさがお」の種12粒が紙に包まれて、ていねいにしまわれていました。野鳥や植物など、小さな「いのち」までいつくしみ、愛されるいかにも鴨下先生らしい品々でした。

「いのちの碑」の建立

平成7年の3月7日に、鴨下先生のご家族のご厚意により、常に「いのちの尊さ」に思いを致し、「いのちの日」制定の趣旨を永く忘れることのないよう、その決意を碑に刻み、「いのちの碑」が建てられました。



レリーフ

この石碑には、少女がやさしく、鳥を包み込むように、手を差し出している姿が刻まれています。そのレリーフには、少女には不釣り合いな、男性のようなごつい手が彫られています。

なぜそのような不釣り合いな手になったのでしょうか。そのレリーフの製作を指導した当時の美術の先生であった榎(さわらぎ)先生が、以前、鴨下先生に、ホタルが見える場所を聞いたときのことで、榎先生はホタルがいたら捕まえて持って帰るつもりで、鴨下先生に「ホタルは手で捕まえられるの」と聞くと、鴨下先生は、その両手を優しく合わせ「こうやってそっと捕まえるといいよ」と教えた後に、「ホタルはその場所で生きることが一番幸せなんだから、捕まえても持って帰らない方がいいですよ」と言われました。榎先生は、その時の小さな命をそっといつくしむような、限りなく優しい表情をした、両手のことが脳裏に焼きついたそうです。

榎先生は、この話を一切、製作者の生徒には話さなかったのに、不思議なことに、少女の像のはずが、両手だけが、まるで鴨下先生が優しく鳥を抱いているような手の形ができあがりました。その手の温かさは、鴨下先生の心そのものであり、やわらかく曲げられた指の優しさは、鴨下先生の生き方そのもの。そんな想いがあのレリーフには込められています。是非、あの石碑の中に込められている想いを生徒のひとりひとりがしっかりと心に刻んで欲しいと思います。

秋多中の取り組み

- ①「健康と安全を願う日」を永年祈念日と制定されてから秋多中では、平成8年度より、毎月1回、交通安全のための街頭指導を登校時に実施しています。(自転車登校生徒のヘルメット着用義務)
- ②生きていたならば鴨下先生自身がきっと栽培したであろう、そのあさがおの種を植えてみたところ、そのうちの5株が花をつけました。秋多中では鴨下先生の意志を引き継ぎ、「あさがお委員会」を設置しました。その委員会は、発展的に解消しましたが、今は、多くの生徒で育てその種を毎年、生徒全員に12粒ずつ配り、また、地域の方へ鉢植えをお配りして、「朝顔と共に広がる いのちの日」という句を実践して、共に育てる活動をしています。

(1年の総合学習・朝顔を育ていのちの大切さを地域と共に学習する)

- ③道徳授業地区公開講座の実施。(学年のテーマに応じ各クラスに講師が入る地域一体型の授業の実践)
- ④人権尊重教育推進。(いじめのない学校を目指す)(マイナス言葉撲滅)